慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	平成23年度若手研究成果報告会(2012年2月8・ 9日 東館4階セミナー室)
Sub Title	Annual seminar of young researchers
Author	田谷, 文彦(Taya, Fumihiko) 四本, 裕子(Yotsumoto, Yuko) 三宅, 博子(Miyake, Hiroko) Mohácsi, Gergely
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2012
Jtitle	Newsletter Vol.18, (2012. 3) ,p.8- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000018-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成 23 年度若手研究成果報告会

Annual Seminar of Young Researchers

（2012年2月8・9日 東館4階セミナー室）

2012 年 2 月 8・9 日、二日に渡って、三田キャンパス東館 4 階セミナー室において、平成 23 年度若手研究成果報告会を開催した。同会には、本人文グローバル COE の若手研究者 20 名と、本 GCOE の事業推進担当者が参加し、熱のこもった発表および質疑応答が行われた。

初日の午前中のセッションでは、主に動物を対象とした研究の成果の報告が行われた。拠点リーダーの渡辺茂文学部教授から開会の挨拶が行われた後、山﨑由美子特任准教授より、コモンマーモセットが道具使用を学習する際にどのように般化が行われるのかについて発表があった。次に、一方井祐子研究員より、セキセイインコによる、つがい相手との間での闘争後第三者親和交渉について研究の報告が行われた。続けて、近藤紀子非常勤研究員が、ハシブトガラスが個体認知を行う際に、声と姿を統合しているか、また声と姿の統合には社会交渉が必要かを検証する実験の結果を報告した。最後に、柴田みどり非常勤研究員より、fMRI によるユーモア理解の処理に関わる神経メカニズムの研究成果について報告が行われ、午前中のセッションを終えた。

午後は、７件の発表がおこなわれた。まず、脳と進化班から四本裕子特任准教授と桑原明栄子非常勤研究員が「人間の視覚情報処理過程の検証」、田谷文彦特任助教が「認知的および感情的フィードバックの処理に関わる神経機構の解明」、寺澤悠理非常勤研究員が「内受容意識と感情の認識」を発表した。続いて哲学・文化人類学班の秋吉亮太特任助教による「形式主義の再検討に向けて」、論理・情報班の村井忠康非常勤研究員による「カントと概念主義」、哲学・文化人類学班の鈴木康則非常勤研究員による「神と動物—デリダの神学的動物論」の発表がおこなわれた。

二日目は午後から遺伝と発達班 2 名、言語と発達班 3 名、哲学・人類学班 5 名による報告会が行われた。前半は、遺伝と発達班から、GCOE 赤ちゃんラボでの乳児を対象とした脳機能および行動研究、慶應大学 NICU での新生児脳機能研究、CARLS と提携のあるフランス ENS との乳児脳機能についての共同研究、乳児を対象としたオムツ触感の快・不快における行動の異なりに関する研究、健常新生児と未熟児による母親声と非母親声の聴き分けの差異に関する研究等が報告された。続いて言語・認知班は、母語処理における処理スピードの速さと外国語の能力との関係・言語以外の記号体系（例えば数学）処理能力との関係についての脳科学的研究、顔の再認課題前に従事していた課題が顔の再認に与える影響についての実験的検討、第二言語獲得者による定名詞句・不定名詞句の区別に関する研究を報告した。後半は哲学・文化人類学班からの 5 名が報告を行った。医療人類学の立場からは、3 名が、糖尿病の治験薬という「もの」の民族誌を通じて患者の経験という感性的側面と薬の効果という論理的側面との関係を論じる研究、発達障害者の cure と care を巡る療育現場での実践についての研究、自閉症児が経験している感覚世界に焦点を当てた音楽療法プロセスの意味についての研究が報告された。美学の立場からは、L. ヒルシュフェルト＝マックの映像作品《色光運動》を中心に 1920 代ドイツにおける「結合メディア」としての触覚に焦点を当てた研究、テレマンの出版楽譜における彫版スタイルから出版年代を再考する試みが報告された。

2 日間を通して、多岐にわたる内容が出題され、20 名の報告が行われた。拠点リーダーの渡辺先生の言葉どおり、「お互いに学びながら成長する」ことが改めて実感でき、またさまざまな分野の対話を通じて、これからも論理と感性の研究が発展し続けることが望まれる。

（田谷文彦、四本裕子、三宅博子、モハーチ・ゲルゲイ）

The fourth Annual Seminar of Young Researchers was held in the Seminar Room of the East Building at Mita campus, Keio University on February 8-9, 2012. In this meeting, young researchers including associate professors, assistant professors and researchers in CARLS reported about their recent research activities and study results. Members of the GCOE as well as guests from different fields involving neuroscience, genetics, psychology, philosophy, linguistics, anthropology and logics discussed each topic in a highly interdisciplinary setting demonstrating once again the scientific and practical possibilities that lie between logic and sensibility and ahead all of us.